

## 「内分泌・代謝病学」第3版

京都大学教授 井村裕夫 編集  
京都大学助教授 清野 裕 編集協力

本に対するまったく単純な好き嫌いの感情から「この本が好きだ」と思うことがある。「NIM LECTURES」シリーズには、そんな本が何冊かある。

今回、そのうちの1冊、井村裕夫先生の編集による「内分泌・代謝病学」が6年ぶりに改訂され、第3版が上梓された。

書棚にあってまず目につくのは、旧版に比してその厚さを増したことである。このことは、その内容がより詳細になったことを端的に示している。開いて気がつくことは、これまでとは違って2色刷りになり、一見して理解しやすくなったことである。他人はともかく、これまでの自分には、教科書とは堅いもの、難解なものとの先入観から、その文字や図表が網膜に結像しても、それより奥まで到達するのにはかなりの抵抗があった。それが2色刷りになっただけで、平面図が立体像へ変貌したようにその実体がよくわかり、視界に抵抗なく入ってきて大脳皮質まで

すぐに到達できそうな気分になる。どうも錯覚ではないらしい。わが「教科書トハ難解ナモノ」論が偏見であったことを反省すると同時に、製作者の見識が感じられ、ありがたいと思うのである。

もちろん、内容の進歩にも著しいものがある。近年の内分泌・代謝部門は、決してほかの部門がそうではないというのではないが、新しい知識がどんどん展開されている。そこで月刊誌とは異なり、教科書となれば新知見がどこまで取り入れられているかが気になってくる。失礼ながら、多分このあたりまでは間に合っただろうが、このことまでは書いてないだろう、などと勝手に想像する野次馬根性をお持ちの方も多いに違いない。もちろんこれを書いている筆者もその1人である。そこで試みに、日頃から自分が興味をもっている部分について、この第3版を開いてみた。すると新知見どころか、新新知見までもしっかりと記載されていて、わが浅学を自覚する結果とな

ってしまった。これには敬服するのみである。更に、「これについてはまだ明らかにされていない」という記載があることで、どこまでが確定した事実で、どこから先がまだ仮説なのかをはっきりと示している。これは貴重なことである。

しかし、だからといって最先端のことだけが書いてあったのでは、医学生や研修医にとっては、取っつきにくい、わからない、となってしまう。本書はそうではない。山登りにたとえば、麓ののんびりとした景色を眺めながら登りはじめ、次第に標高を増していき、最後はそそり立った険しい峰まで登るように、各章ともに基礎知識から筆を起す方式の行き届いた心配りで書かれている。執筆された方々の配慮が感じられるのである。とくに各章ごとに完結しているので、筆者のような怠け者には抜き読みができるので誠にありがたい。

医学生や研修医のみならず、斯界の専門家にまで、卒後教育や生涯教育用に備えたい1冊である。

(聖マリアンナ医科大学助教授・第3内科)  
齋藤 宣彦

●B5 678頁 写真81 原色図14  
色図346 1991年 定価7,210円  
(税込) 千300円

医学書院 刊(☎03-3817-5657)